

共催セミナー

電磁過敏症って本当にあるの？ —WHO の見解を紹介します—

大久保 千代次

一般財団法人 電気安全環境研究所
電磁界情報センター 所長

演者紹介：木下 浩一（一般財団法人電気安全環境研究所電磁界情報センター）

協賛：一般財団法人電気安全環境研究所 電磁界情報センター

電磁過敏症って本当にあるの？ —WHO の見解を紹介します—

大久保 千代次

一般財団法人 電気安全環境研究所 電磁界情報センター 所長

近年、個人あるいは事業目的による電磁界 (EMF ; electromagnetic fields) の発生源の増加やその形態の多様性には眼を見張るものがある。これらの技術は我々の生活をより便利に、より快適にする一方、電気を使えば必ず電磁界が発生し、その健康影響に関する国民の不安は少くない。

1996年に開始した、WHO (世界保健機関) の国際電磁界プロジェクト (International EMF Project) の主目的は、0Hz から300GHz までの電磁界の健康リスクを行うことである。

健康リスク評価を行う際にその周波数にかかわらず問題となるのが、電磁過敏症 (EHS ; electromagnetic hypersensitivity) である。電磁過敏症は、ICD-10には登録されておらず、電磁界に起因する特発性環境不耐症 idiopathic environmental intolerance attributed to electromagnetic fields [IEI-EMF] と表現することもあるが、明確に疾病概念は定まっていない。電磁過敏症に関する調査研究は、欧州を中心に数多く実施されている。我が国でも総務省の生体電磁環境研究費で実施された。それらの結論を要約すると、現時点では、電磁過敏症発症と電磁界ばく露を結び付けるような科学的根拠は存在していない。電磁過敏症は明確な診断基準を持たず、その発症原因は不明だが、「ノセボ効果」が介在していると推察されている。共催セミナーでは、WHO の見解を中心に、電磁過敏症に関する最新の知見を紹介したい。